



特集 のぼりべつに必要なもの ～第3回全国大学政策フォーラムin登別～

8月11日(月)から13日(水)までの3日間、自治体政策を学ぶ大学生・大学院生が登別市に集い、市民との交流やフィールドワークを通してまちづくりの実態を学び、自治体政策などについての提言とフォーラムを行う『第3回全国大学政策フォーラムin登別』が開かれました。

今月号では、その内容についてお知らせします。

全国大学政策フォーラムとは

地方自治体は、地方分権改革の進展に伴い、担う役割と責任が大きく拡大している中で、抜本的な打開策をなかなか見いだすことができない財政問題や少子高齢問題など、さまざまな問題を抱えています。

一方、全国の大学では、こうした社会の要請に応えるため、政策系大学院や学部が年々増加する傾向にあります。社会という実際の現場を検証した上での政策を提言する機会がほとんどありませんでした。

そのため、一昨年から同志社大学をはじめとする全国の大学や登別市議会、登別商工会議所、登別観光協会、登別市などが実行委員会を組織し、登別市を会場として政策の議論を行う『全国大学政策フォーラム』が開催されています。このフォーラムは、回を重ねるごとに、参加大学やグループ数も増え、大学生の政策発表の場として盛り上がりを見せています。

第1回では『登別市の観光政策を考える』をテーマに、第2回では『登別らしさを政策にのぼりべつ発見の旅』をテーマに、さまざまな政策提言が発表されました。

のぼりべつに必要なものを 知るために

今年のフォーラムには、岩手県立

大学、日本大学、埼玉大学、立教大学、首都大学東京、同志社大学、龍谷大学から学生・教授など66人、11グループと若手市職員4人で構成する1グループが参加しました。

1日目は、婦人センターで、初めての試みとなる『商工・観光』『民生・保健・福祉』『まちづくり・教育』の3テーマによる分科会が行われ、市職員や市議会議員、それぞれのテーマの関係者、学生による意見交換を行いました。その後、市内一円をバスで視察し、夜には交流会が開かれました。

2日目は、市役所本庁舎を拠点に、グループ提言の資料収集のため、市職員やホテル、温泉街の商店、まちづくり団体などにインタビューを行いました。

3日目は、各グループが政策提言を行ったほか、同志社大学教授をコーディネーターに迎え、入賞したグループやまちづくり団体の代表など7人をパネリストにフォーラムが行われました。

学生ならではの視点から さまざまな政策提言を

各グループの提言では、『Quest!のぼりべつに必要なもの』をテーマに、さまざまな視点からユニークな政策提言を行いました。

それでは、グループ提言とフォーラムの一部を紹介します。